

「クレオパトラの鼻」について

上田 信

歴史学でしばしば言及されるタブーの一つに、「もしクレオパトラの鼻が低かったら」というものがある。過去に起きた出来事について、*It*を語ってはいけない、とされる禁忌なのであるが、その出典をたどるとそれは大きな誤解、あるいは曲解といっても過言ではないことが明らかとなる。「クレオパトラの鼻」を最初に言い出したのは、フランスの哲学者パスカル。『パンセ』の一節を読むと、カオス理論のキャッチコピーとしてよく知られたバタフライ効果の議論を、パスカルが先取りしていたことがわかる。これは驚きであった。

私自身がそのことに気づいた契機は、二〇一六年の春学期に行った「グローバル・ヒストリー」をサブタイトルとする史学講義の授業のなかで、受講していた学生のコメントペーパーをとりあげたときに訪れた。

そもそも「クレオパトラの鼻」が、この授業でなぜ問題となったのか。結論から述べるならば、「歴史は自己組織化するシステム」ということが授業の主題であったからである。迂遠ではあるが、授業の

「クレオパトラの鼻」について（上田）

流れを紹介する必要があるだろう。

授業は、岩波新書のE・H・カー（清水幾太郎訳）『歴史とは何か』（初版一九六二年）を批判する形で展開された。この著作は歴史学の概説で、今日にいたるまで必ずと言っていいほど参考文献リストの冒頭に挙げられる。そのため、授業のために新たに購入した現行版は、二〇一五年で第八四刷となっている。この著作、実は授業で取り上げようと思い立ったときまでは読む気にはなれず、天邪鬼な私は頁をめくることなく書架の奥にしまい込み、手に取ることすらしていなかった。歴史概論の金科玉条、歴史学徒にとつての經典のように扱われていたことに、反発したからである。しかし、読んでみると、突っ込みどころ満載の著作であることが、分かった。

著者のEdward Hallett Carrは、一八九二年に生まれ一九八二年に九〇歳という高齢でなくなっている。ケンブリッジ大学を卒業後にイギリス外務省に勤務し、第二次世界大戦中はイギリス情報省の職員として務め、『タイムス』紙の記者を経て、ケンブリッジ大学にもどつてロシア革命史の研究に専念した。

『歴史とは何か』のなかで、もっとも有名な一節は、「歴史とは歴史家と事実との間の相互作用の不断的過程であり、現在と過去との間のつきることを知らない対話なのであります」（清水訳）であり、その原文はWhat is History? My first answer therefore to the question, is that it is a continuous process of interaction between the historian and his facts, an unending dialogue between the present and the past となっている。授業はその一節の批判を軸に進められた。

批判のその一は、歴史を造るのはhistorian（歴史家）なのか、ということである。ここでは歴史家

に特権を認めていいのだろうか。カーは当時の著名な歴史学者を引き合いに出しながら、みずからの見解を展開している。しかし、カー自身が生粋の歴史家というわけではなく、情報を扱う専門家から身を起こした人物である。私の授業で強調したことは、歴史に対する思索を歴史家に委ねるのではなく、「ここにいる一人ひとりが歴史を造る」という自覚を持つ、ということであった。

批判のその二は、歴史の構成要素は、facts（事実）なのか、という点にある。fact の原義は「造る」「造られたモノ」であるが、そのときに問われることは、いったい誰が「造る」のか。見識を有する歴史家が「造る」と、カーは主張する。無数に存在する事実から、「歴史的事実」を選別するのは、歴史家なのだという。歴史家の特権を認めない授業では、fact に対して、incident（出来事）を歴史の構成要素とすることを提示した。

incident の原義は「内へと落ちる」、つまり一人の認識主体が考察している事柄のなかに落ちてきたコトが出来事なのである。落ちてきた出来事を、思索の過程で他の出来事と関連づけ、新たな認識が立ち現れたとき、それは事件 event（原義は「外に来る」）を構成する出来事となる。他の出来事との関連づけを行わず、認識を変化させるにいたらず、考察している範囲を擦るように落ちてきた出来事は、事故 accident（原義は「前に落ちる」ということになる）。

「何か」(what) という問いかけによって名づけられる出来事は、「いつ」(when)、「どこ」(where)、「誰が」(who) という要件によって、歴史的な時空間のなかにピン止めされる。そして、「なぜ」(why) と問うことで、時間軸のうえで他の出来事と関連づけられる。つまり「なぜ」その出来事が起きたのか、と問えば、過去にさかのぼって理由となる出来事を発見することになり、「何のために」その出来事を

「クレオパトラの鼻」について（上田）

起こしたのか、と問えば、未来に向かって目的となる出来事を発見することとなる。さらに「どのように（how）」という問を発すれば、空間軸のうえで他の出来事と関連づけることが可能となる。つまり、出来事はジャーナリズムの鉄則とされる5W1Hに要約される問に対して、認識主体が答えるなかで、思索は進むのである。

一例を挙げよう。Whenは二〇一〇年二月一七日、Whereはチュニジア中部スィディ・ブーズィード、Whoはムハンマド＝ブアズイー＝ズイー（当時二六歳の男性）がWhat「焼身自殺を図った」。これが一つの出来事である。焼身自殺を図るという出来事は、それほど珍しいことではない。しかし、もし認識主体が「いまシリアのアレッポで、多くの命が奪われているのはなぜか」ということを考察しているとしたら、この出来事は事件の重要な一要素である。

すなわち、howという問を発すると、この焼身自殺を目の当たりにした周囲にいた人々は、激高したという出来事に結びつけられる。whyという問を発すると、彼が失業していた、という出来事に結びつき、青年が多く失業しているというアラブ世界共通の社会問題とつながっていく。一つの焼身自殺という出来事は、大きな大衆運動の引き金を引くこととなり、いわゆる「アラブの春」を引き起こした。そして、この波がシリアに及んだときに、シリア内戦という状況を惹起したからである。授業履修者のコメントに、こうあった。「この出来事がアラブの春の引き金になったことは知らなかったので、驚きました。まるで、バタフライ効果みたいなことが起きたのと思いました」。

もう一つ、別のwhatを「焼身自殺を図る」とする出来事を、紹介しておこう。Whenは二〇一四年六月二十九日、whereは新宿駅南口ルミネ前、whoは当時六三歳の男性であった。この出来事を記憶し

ている人は、多くはない。一〇〇名ほどの授業履修者のなかで、ただ一人だけが記憶していた。その理由は、その日が自分の誕生日だったから、というもので、この出来事を思索しようとしていたわけではなかった。howとしては、サザンテラスと接続する歩行用の歩道橋鉄橋に乗り上げ、メガホンで何かを訴えたあと、自身にガソリンを頭からかけ火をつけたという出来事の連鎖が浮かび上がる。しかし、これを見ていた通行者は多かったにもかかわらず、激高する人はいなかった。これも一つの出来事である。また why「何のために彼は焼身自殺を図ったのか」という問に答えようとすると、直前に集団的自衛権容認に反対のスピーチをした、という出来事に行き当たる。「なぜ彼は焼身自殺を図ったのか」という問いかけをするならば、「彼は生活困窮者だったらしい」というあいまいな出来事に行き当たる。この出来事を集団的自衛権との関連で思索した場合、この出来事が日本のマスメディアではほとんど報道されなかったのに対して、欧米の新聞ではかなり大きく取り上げられたという出来事と関連づけられよう。日本のメディアの偏向性を示す事件として、歴史的考察のなかで位置づけることも可能であろう。他方、生活困窮者という文脈で扱った場合には、見捨てられる生活困窮高齢者の一つの悲劇として位置づけられるのかも知れない。

二つの「焼身自殺」事件を比較したとき、チュニジアの事件は歴史的激動を引き起こしたのに対して、日本の新宿事件は人々の記憶に残ることはなく、一つのエピソードとして辛うじて語られるに過ぎない。その差異は、どこにあるのか。授業で説明したことは、非線形的変化という考え方である。

古典的な論理学では、自分自身を含む命題を排除してきた。有名な論理学のパラドックスとして「ある人は自分が嘘をついていると言う。さて、彼は本当のことを言っているか、それとも嘘をついている

「クレオパトラの鼻」について（上田）

か」という命題がある。パラドックスの発案者は、紀元前四世紀頃のミレトス出身のメガラ学派の哲学者エウプリデスであるとされる。

堂々巡りになる自己言及を含む命題を、古典論理学は無効としたのである。現代になると、バートランド・ラッセルなどがパラドックスを回避する思索を展開し、ポストモダン論理学は、自己言及を積極的に考察の対象とするようになった。その過程でサイバネティクス、フィードバック、自己組織性、複雑系など、さまざまな思索を生み出している。

私自身がこうした潮流に触れたのは、高校生の時期にノーバート・ウィーナー著、池原止戈夫訳『人間機械論…サイバネティクスと社会』（みすず書房、一九五四年）に出会い、衝撃を受けたところにさかのぼる。サイバネティクス cybernetics の語源は、ギリシャ語で「（船の）舵を取る者」を意味するキベルネテスで、サイボーグ (cyborg ↑ cybernetic organism)、サイバースペース (cyber-space ↑ cybernetic space) などの造語を生み出している。

人間と機械との関係について、古い機械観では、人間↓機械↓成果と一方的に進むのに対して、サイバネティクスの機械観では、人間↓制御機構↓作動機構と進んで現れた成果が、作動機構から制御機構に影響を与えることで、機械が自己制御される。もっとも単純な例が、冷蔵庫の庫内温度がある一定の幅のなかで維持されるというものがある。サーモスタットが制御機構にあたる。受講生になぜ冷蔵庫の庫内温度が、摂氏五度前後に保たれるのだろうか、と質問したが、誰一人として回答できなかったことは、かなりショックであった。

出力（結果）を入力（原因）側に戻す操作は、フィードバック feedback（原義は「帰還」）であり、

フィードバック機能を有する機構をシステムと呼ぶ。入力側に帰還したときに出力を抑制方向に作用する場合は、負のフィードバック *negative feedback* であり冷蔵庫がその実例となる。他方、入力側に帰還したときに出力を促進方向に作用する場合は、正のフィードバック *positive feedback* であり、その実例がエレキギターにみられるハウリング *howling* (スピーカーからの出力された音がマイクに拾われて帰還され、音量が増幅される) である。

正のフィードバックが起きている場合、ときに非線形的な変化が生じることがある。ここで映画『バック・トゥ・ザ・フューチャー (Back to the Future)』のマイケル＝J＝フォックス演じる高校生が、巨大なスピーカーをハウリングで破損させる冒頭のシーンを想起するように促したのであるが、誰一人として観ていなかったことにも、ショックを受けた。たとえばエレキギターの音量を y 軸、スピーカーから出る音量を x 軸とするグラフを描いたとき、ギターの音量が一定の範囲にとどまる場合には、グラフは連続している。ところがハウリングが極端に進みスピーカーが破損すると、グラフの x の値は突然に無音 0 に飛躍する。これが、非線形的変化の一例である。

多くの要素が互いに影響しあっているシステムでは、平均値のまわりに値が変動する「ゆらぎ」と呼ばれる事態が現れる。負のフィードバックが作用している場合には、たまたま現れた大きな「ゆらぎ」に対して、変化を相殺する力が働き、一定状態が保たれる。これを平衡状態という。ところが正のフィードバックでは、「ゆらぎ」の変化が加速され、別の状態に変わる可能性を秘めた状況が生まれる。これを非平衡状態と呼ぶ。臨界点を越えたとき、非線形的変化が現れ、以前の状態とは全く異なる状態が自発的に生まれることがある。ゆらぎをはらんだ要素のあいだの関係のなから、ポジティブ・フィ

「クレオパトラの鼻」について（上田）

ドバックを通じて自ずと秩序が形成されることを、自己組織化という。

授業のなかで紹介した自己組織化の具体例が、ベナール対流である。味噌汁を温めていると、ある条件のときにセル（蜂の巣状の模様）が現れる。セルの配列は、たとえば味噌汁が何度に暖まるとどのような形になるか予測できる、ということではなく、鍋の底の小さな傷であるとか、たまたま対流が起きる直前に味噌の塊が鍋の縁の近くにあったといった、きわめて小さな条件によって、まったく違う形のセルが出現する。微視的初期条件によってその後の巨視的状态は大きく異なるという現象が、バタフライ効果と呼ばれるものである。

バタフライ効果というキャッチコピーは、気象学者のエドワード・ローレンツが一九七二年にアメリカ科学振興協会で行った講演のタイトル「予測可能性：ブラジルの一匹の蝶の羽ばたきはテキサスで竜巻を引き起こすか」『Predictability: Does the Flap of a Butterfly's Wings in Brazil Set Off a Tornado in Texas?』に由来するとされている。これを歴史の比喻として用いるならば、非平衡状態のなかではほんとうに些細な出来事が、とんでもない大きな歴史的な変化を引き起こすことがある、ということになる。チュニジアでの焼身自殺の場合、ムハンマド・ブーアズイー・ズイーが知人からどのように思われていたか、という事柄が、その後の事態を左右したかも知れない。もし、疎まれている人物であったとしたら、「アラブの春」は起きなかっただろう。しかし、それはブラジルの蝶の羽ばたきとテキサスの竜巻との関係を論証しようとするようなもので、論証はできない。しかし、焼身自殺を図ったという出来事が大きな政治的な事件の一要素であったということは、間違いない。青年の自殺は、失業している若者が多いという非平衡状態のなかで共感を呼び、チュニジアでのジャスミン革命勃発の契機となり、

同様の問題を抱えたアラブに波及して連鎖的に政変が続き、いまだに終わらないシリア内戦を引き起こしたのである。

ここで再びカーの『歴史とは何か』に、戻ることにしてしよう。岩波新書の二三〇頁から一三二頁にかけて、つぎのような一節がある。

受験生が「なぜ一九一七年のロシア革命が起こったのですか」という質問に答える段になって〔中略〕経済的・政治的・思想的・個人的な原因を、長期的および短期的な原因をこたこた挙げる〔中略〕「こうした解答の評価は」中にはなれるでしょうが、上になるのは難しいでしょう。本当の歴史家なら、自分の手で作った諸原因のリストを眺めておりますうち、このリストを秩序づけよう、諸原因相互の関係を整理するようなある上下関係を設定しよう、〔中略〕いかなる原因を〔中略〕究極原因をみるべきか〔中略〕決定しよう、そういう職業的義務を感じるでしょう。

カーの研究の方法論は、究極原因が一方的に他の要因に影響を与えて結果を生み出すという、古典的な論理学の枠組みのなかで展開されている。授業のなかで私が提示した自己言及を認め、自己組織性の視座に立つ枠組みのなかでは、究極の原因を求めるのではなく、諸要因の関係の連なりから、フィードバックのループを見いだすように努めるということになる。無数に存在するループのなかで、変化を強化して非線形的な変化をもたらした原因と結果のループを発見することが重要なのである。

そこでようやく、クレオパトラの鼻である。カーは次のように述べる。

歴史とは、〔中略〕全く気まぐれな原因とよりとしか見えない諸事件の連続であるという理論があります。〔中略〕アクチウムの戦闘の結果は、〔中略〕アントニウスがクレオパトラに夢中になった

「クレオパトラの鼻」について（上田）

せいだということになります。こういう歴史上のいわゆる偶然というのは歴史家がその研究に専念している最も本格的な原因結果の連鎖を中断するのです（二四四頁）。

「クレオパトラの鼻」は、究極原因でないから考察に価しないと判断する役割は歴史家にある、と力ーは述べる。

原因が歴史的過程に対する歴史家の解釈を決定すると同時に、歴史家の解釈が原因の選択と整理とを決定します（一五一頁）。

ここでカーは、史学概論といった講義で繰り返し言及され、うんざりするほど聞かされ、私の耳に胼胝を作ってきた「現在と過去との間のつきることを知らない対話」に立ち返る。

アントニウスがクレオパトラの鼻に夢中になったというような、この二重の目的「現在の光に照らして過去の理解を進め、過去の光に照らして現在の理解をすすめる」に役に立たぬ事柄は、歴史家の見地からすれば、すべて死滅した不毛なものであります（一五八頁）。

究極原因を確定する責務は歴史家にある、というカーの言説は、歴史学の貧困を招いているように、私には思われる。

「クレオパトラの鼻」について、「このように顔の部位にこだわるのは、女性差別だ」という学生のコメントがあった。「クレオパトラの鼻」を最初に問題にしたパスカルは、そもそものように述べているのだろうか。この「鼻」に関する言及は、塩川徹也訳の岩波文庫『パンセ』では、中巻の四三〇四四頁で読むことができる。

人間のむなしさを十分に知りたければ、恋愛の原因と結果を考察するだけでよい。その原因は、「私

には分からない何か」なのに、その結果は恐るべきものだ。この「私には分からない何か」、あまりにも些細で目にもとまらないものが、あまねく大地を、王公を、軍隊を、全世界を揺り動かす。クレオパトラの鼻、もしそれがもう少し小ぶり（原語は *court*）だったら、地球の表情は一変していたことだろう。

フランス語の *court* は、直訳すれば「短い」ということになり、美的価値観を含まない。パンセは、美醜については語ってはいない。パスカル自身は恋愛を話題にしているのではあるが、その含意は紀元前三〇年代の非平衡状態に置かれた地中海世界において、鼻の大きさという微視的初期条件の違いが、その後の巨視的状态の差異を生み出す可能性を秘めている、ということである。クレオパトラの鼻もまた、役に立たない事柄として捨てるのではなく、歴史のなかの出来事の一つとして検討してみよう、こうした歴史も私は可能だと考える。

歴史を豊かにするには、どうすればよいのか。カーが歴史的事実について述べた次の一節を批判的に検討することで、最後に私の考えを述べておこう。

シーザーがルビコン河を渡ったという事実と、部屋我真ん中にテーブルがあるという事実。過去に関するすべての事実が歴史的事実であるわけではない。（六〇七頁）

おそらくシーザー（カエサル）は、その人生のなかで何度となくルビコン河を渡ったであろう。そのなかで、紀元前四九年一月一〇日の渡河だけが、歴史的事実としてカーが認定する出来事である。時空間のなかで連鎖している出来事から、when、where、who によって切り出された出来事 what に対して、why、how と問いかけることで他の出来事との関連を探るときに、モノ・ヒト・イミの三

「クレオパトラの鼻」について（上田）

つの位相に分ける。

モノとは物質的な関連であり、ルビコン川が当時、どこを流れていたのか、といったテーマを考えることにつながる。ヒトの位相では、このときのカエサル の地位や彼が率いていた軍隊の構成員との人的な関係を探ることにつながるであろう。イミの位相では、共和政末期の古代ローマにおいては、なぜ軍団を率いてこの川を越え南下することは法により禁じられ、禁を破ればすなわち共和国に対する反逆とみなされたのか、他の法例などとの関連で掘り下げていくことになる。

これと同様に、ある部屋の真ん中に置かれたテーブルも、歴史的に観ようと思う視点によって、歴史的事実になりうる。モノの歴史のなかでは、たとえば、家具の変遷としてテーブルの大きさや高さ、素材といった要素を考えることになるであろうし、ヒトの歴史では、重要な宴会において、その一脚のテーブルに座る席次を調べることで、その場に居合わせた人々の序列を説明する手がかりを与えてくれるであろう。イミの領域では、テーブル・マナーの歴史として、過去の現場に存在したテーブルを取り上げることも可能なのである。

歴史的事実を選別するのは、歴史家だけの責務ではない。いまを生きる一人ひとりが、よりよい一步を踏み出すために、過去を振り返る必要がある。このときに、一見すると「クレオパトラの鼻」のよう な些細と思われた出来事も、その後の世界の有り様に影響する可能性もあるのである。そう、学生自身の些細な決意が、大きな変化を惹起する可能性もあるのである。

これが、私の史学講義「グローバル・ヒストリー」に込めたメッセージであった。

（本学文学部教授）